

二〇二〇年 年頭司牧書簡

司教 ベルナルド 勝谷 太治

札幌教区の皆さんに年頭のご挨拶を送ります。

今年も皆さんの上に神の豊かな祝福がありますように+

さて、昨年はカトリック教会のみならず日本中に教皇フランシスコ訪日の熱い旋風が吹き荒れました。教皇は中



二日の短い滞在期間中、精力的に移動し多くのメッセージを残していけました。滞在期間が長ければ、各分野のより多くの人々との触れ合いや話し合いの場を設けられたのですが、結果として設定されたのが、長崎広島の爆心地訪問、東日本大震災被災者との集い、青年の集い、そして、長崎東京でのミサでした。オプシオンとして、上智大学訪問もありました。

長崎、広島からの核廃絶メッセージ、そして、青年との集いはフランシスコ教皇の強い望みでもあり、近年教皇が継続的そして重点的に取り組んで来ている課題でもあります。被災者との集

いは日本固有のものですが、苦しむ人々と共に歩もうとする教皇の姿勢を良く表すものでした。発せられたメッセージについてはすでにマスコミがその概要を取り上げ報道されていますし、ネットには全文もアップされています。しかし、あまりマスコミにも取り上げられていない隠されたテーマもありました。「死刑廃止」と「難民問題」です。当初、教会は再審請求中の死刑囚袴田さんとの面会を設定しようとしていました。しかし、公にそれをすることは死刑反対の立場を取る教会が教皇を通して日本の死刑制度へ踏み込んだメッセージを送ることとなるため、実現しませんでした。しかし、一連のイベントの中で偶発的に出会い、言葉を交わすことは可能と考え、東京ドームでのミサ前の謁見中に可能かと思われました。しかし、あの混乱の中でそれは実現しませんでした。一部のマスコミがこれを伝え教会の死刑制度へのスタンスを伝えていましたが、あまり注目はされませんでした。

もう一つの隠れたテーマは「難民問題」です。これも、教皇が着任以来

取り組み呼びかけ続けている事柄です。わたしは東京カテドラルでの「青年の集い」の責任司教でしたが、予想をはるかに超える定数以上の参加希望が殺到し、参加できない青年たちから押し寄せるクレームに対し、なんとか席数を増やそうと苦心していた時でした。いきなり「上」のほうから席を約20席確保するようにとの通達がありました。混乱した現場から私へ確認の依頼が来たので、「上」の出所を尋ねたところ、教皇本人の希望でした。日本にいる「難民」を参加させるようにとのことで座席位置も指定されています。それは教皇が入場し必ず通る最前列でした。実際に教皇は、彼らの前で立ち止まり、親しく時間を取って話されました。

会場には200人を超える外国籍の青年たちもいました。そして、会場の青年たちに向けて次のように話始められました。「皆さんを見ると、今日の日本に生きる若者は、文化的及び宗教的に多様なことが分かります。それぞれが、皆さんの世代が未来にも手渡せる美しさです。皆さんの間にある友情

と、この場にいる一人ひとりの存在が、未来はモノトーンではなく、各人による多種多様な貢献によって実現するものだということを、すべての人に思い起こさせてくれます。私たち人類家族にとつて、皆が同じようになるのではなく、調和と平和の内に共存すべきだと学ぶことが、どれほど必要でしょうか。」そして後半に難民についても言及されました。「さて、特にお願いしたいのは、友情の手を広げて、ひどくつらい目にあつて皆さんの国に避難してきた人々を受け入れることです。数名の難民の方々が、ここに私たちと一緒にいます。皆さんがこの人たちを受け入れてくださったことは、あかしになります。なぜなら多くの人にとつてはよそ者である人が、皆さんにとつては兄弟姉妹だからです。」残念ながらこの点については、ほとんどのマスクミは触れていません。

「核兵器禁止条約」「死刑廃止」「難民問題」これらはバチカンが世界に訴え続けている課題であり、これらに加えて日本の教会の姿勢である「脱原発」について出国後の機内で個人的な意見

としながらもこれを支持する発言をなさいました。これらは日本の政策に反しており、国家元首でもある教皇がこれらの問題に対して直接的に発言することは内政干渉になります。その為の絶妙なバランスを保った上での考え抜かれた各々の発言であったわけです。

フランシスコ教皇の日本社会へ向けた強烈なメッセージは記憶に残っていますが、それらについてどう対応するかはいうまでもなく、上述の隠れたメッセージについても、私たちはそれらをどう受け止め、どう対応していくか考えることは大切なことです。教皇のメッセージは一語一語熟考されて作られたものです。読み流すにはあまりにもつたいない内容を含んでいます。是非、各小教区等で教皇メッセージを改めて読み合わせ分かち合う場を持つていただきたいと思います。

今回の教皇訪日で強く感じさせられたことは、日本の教会が多国籍であるという現実です。上述の青年の集いをはじめ、ミサ等はまさに多国籍教会を体現していました。ミサ参加者に限らず、朗読、聖歌隊、共同祈願をはじめ、

典礼の各奉仕者は多国籍に構成されています。当然、ミサも多言語で捧げられました。日本の教会は日本人の教会ではなく、多国籍の人々によって構成されていることを、教皇を頂点とするミサ典礼の中にはつきりと見て取ることができたのです。

さて、札幌教区の多国籍の現状について目を向けてみます。昨年の年頭書簡でお願いしたことでもありますが、それが着実に実施実現していることを昨年は実感させられました。昨年も、各小教区を訪問して回りましたが、外国籍の信者がいない教会はほとんどありませんでした。そして、地方の教会ほど外国籍の信者の比率は高くなり、教会のミサも教皇ミサ同様、多国籍化しています。あるところではベトナム人信者たちが、私たちはお客さんではないので、もっと責任ある仕事を任せたいと言っていたのが印象的でした。何をしたいのか後で聞いた話では、侍者をしたいとのことでした。外国籍信者のいる地方の教会は、ほとんどが多言語ミサを実施しているのも印象的

でした。彼らがお客さんとしてではなく教会共同体のメンバーとして位置づけられ奉仕していることをうれしく思います。

また、札幌や函館では、技能実習生の集まりを支援するのみならず、具体的な生活支援、そして労働問題にもかわり始めた小教区があります。北海道新聞やNHKテレビにも取り上げられるほど社会に認識されてきています。また、札幌市内の多くの小教区でも同様の支援や交流が行われ、活発化してきていることをうれしく思います。まさに、昨年のラグビーで流行語となった「One team」、多国籍メンバーで構成されながら一つの日本チームであったように、小教区も多国籍メンバーで構成されながら一つの共同体となれるならとても素晴らしいことです。先ほどの青年に向けられた教皇メッセージは私たち札幌教区の教会共同体に向けられた言葉でもあるのです。

昨年7月、教区宣教司牧評議会の答申を受けて小教区積立金の相互利用に

ついでの規定が発効しました。そして、昨年11月には同評議会から、次のような答申がありました。青少年司牧とミッションスクール、そして平和旬間の行事についての答申です。

答申内容

「具体的な取り組みとして、各地区の平和旬間の活動において、教会だけでなくミッション校を交えて検討する場を設け、一緒に考え活動することができるようになる。特に生徒の意見を取り入れるよう努力する。」

つまり、これまで行われてきた平和旬間行事を抜本的に見直し、全地区での教区的な取組みとし、その行事や企画にミッションスクールの高校生も参加してもらいその意見を反映するというものです。例えば、高校生が自主的に企画する平和を考える集い、札幌で例年行われている平和行進を高校生も参加しやすい内容と時間設定とすること等です。また、地方では何ができるか、あるいは地方からの参加も期待した行

事を札幌等で行うかなどの検討を、設置された新しい実行委員会に期待したいと思います。

更に、ミッションスクールとの連携で言えば、環境問題について教会がどう取り組むべきかも、高校生の環境問題教育と連携させて何かできないかと感じています。環境問題については、地球温暖化を引き起こすエネルギー問題やプラスチックごみ等の明確な課題がありながら個人としては取り組みづらい問題でもあります。教会で何かをしたところで大きな改善がみられることはないのは明白ですが、教会が取り組んでいるというメッセージ効果は大きいと思います。私たちが実施していることとして社会に向けた啓蒙活動をする意義は私たちが思っているよりも大きいのです。世界中の教会がこの問題に専門委員会を設けて取り組んでいるのに対し、日本の教会での動きは皆無と言ってよいのではないのでしょうか。札幌から何かを発信できたらと願っています。グレタさんのたった一人の活動が世界

を動かしました。何もしいところからは何も始まりません。

さて、あまり長い文章を書くこと読んでももらえないと忠告を受けたのでこの辺でまとめますが、この他に昨年までの年頭書簡で触れている諸課題は山積し、解決の糸口も見えていないものもたくさんあります。どうかそれらも読み直して私たちに何ができるかを話し合っていたいただきたいと願います。最後に今年年頭の某企業のCMで使われたロジックを使ってわたしなりに作った文をもって終わりたいと思います。

大逆転はおこりうる。

神は私たちと共におられ苦しみからの解放の道を必ず示してください。

わたしはその言葉を信じない。

神は奇跡なんて起こさない。

それでも人々は無責任に言うだろう。

教会は一致団結し、神を信頼していろいろな発想や工夫を駆使して闘え。

今こそ福音に生きる時だ。

しかし、そんな考え方は馬鹿げている。司祭も若者もいなくなった。時流に逆らっても仕方がない。

私はただ、為す術もなく流される。

教会の未来はどうなってしまうのだろう。もはや絶体絶命

この文に同意できる方はこのまま読み終えてください。何を言っているのだとご立腹の方はこの文を最後の行から最初に向けて読んでください。大逆転が起こります。

2020年1月